

第 1 表 「伊吉」果粒の変更

母樹 房番 果粒長径 (mm)	A 株					B 株					C 株					D 株				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
6.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
6.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
7.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	4	5
7.5	0	6	0	3	4	1	4	7	5	0	1	0	0	0	0	14	3	5	9	17
8.0	2	13	4	6	2	7	34	15	13	1	1	0	0	2	3	48	15	17	38	37
8.5	4	8	6	4	5	5	36	27	21	4	5	4	5	5	15	61	35	32	62	42
9.0	15	14	2	18	13	8	9	7	11	18	24	5	14	12	23	47	60	53	100	59
9.5	7	30	15	22	19	6	19	6	7	10	12	10	3	5	8	8	20	33	22	6
10.0	15	63	18	26	44	13	31	7	28	45	4	8	22	8	9	1	9	16	7	6
10.5	36	46	25	31	45	11	37	8	31	54	8	26	27	31	20	2	1	2	9	12
11.0	44	25	24	34	32	5	50	23	22	42	14	28	31	48	40	10	1	3	7	31
11.5	43	3	17	12	9	5	25	9	5	15	21	19	23	6	8	17	3	6	17	4
12.0	5	0	2	4	2	2	1	0	0	0	4	3	1	1	2	1	0	1	2	0
	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

2) 結果ならびに考察

1. 袋かけ試験の結果、「葡萄」、「昭和福」、「地樹」には全く結実しなかつたが、「伊吉」にはどの房にも、前記の小型果粒とはほぼ同大のものがみえた。

2. この小果粒の長径が描く変異曲線は、袋かけしなかつた「伊吉」の果粒のそのように二頂曲線とはならず、単頂曲線のうちの小粒側の曲線とはほぼ一致す

るものとなつた。

3. この小果粒は袋の外からの花粉を受けないでみえたのであるから、単為結果あるいは自花授粉によつて結実したものと思われる。自然のままの「伊吉」の小型果粒もこれと同じ原因で結実したものである。この点はもう少し明らかにしたいと思つている。

### 43. ユーカリ育苗の実例

福岡県林試 青 木 繁

1. この記述の目的

パルプ適材、生長迅速の二つの要素に基いて、概して東京以西の無霜地帯における造林樹種として奨励せらるべきであると認められたユーカリ、特に大葉ユーカリ（ロブスタ種）につき、その育苗技術の実例を述べて、今後の研究と造林の実際に資し、これが増殖を推進したい。

2. ユーカリの育苗上の難点

① 直根性であるので、これを抑制し、ひげ根を発達せしめなければならない。

② 上長生長が極めて速いので、俗に云う線香苗となり易い。従つてこれを防ぎ、直径生長を促進しなければならない。

③ 山行に適する良苗を得るには何月頃播種すればよいか。

以上の三つの難点が未解決のまま今日に至つているのが、ユーカリの造林の進展普及しない重大な原因であるのではないかと私は思つている。

そこで私は、本年春、台湾訪問の際には、特にユーカリについても再検再考し、種子を持ち帰りて育苗を実行したので、これ等の難点解決の資として、育苗技術の実例を御参考に供する次第である。

### 3. 苗圃作業

1. 苗圃の位置 大分県東国東郡武蔵町（ムサン）、面積1反歩余。
2. 海岸砂丘より約300m距つた水田で、灌排水共自在。砂質壤土。
3. 床造りは町墾で、播種床は全体をつとめて水平に均し、鋤起してかき、塊を細砕した。
4. 床巾3尺、床の高さ5寸。表土層2、3寸を篩にかけて、板で均し、軽くたたいておいた。
5. 種子を砂と混じ、坪3勺の割で散播とした。被土は砂、見えかくれ程度とした。
6. 播種を終えた後、床面の見えぬ程度に薄く被わらを被い、丸竹でその上を押えた。
7. これだけの用意が出来てから、床面すれすれにまで灌漑した。噴霧器は一切使用しない。
8. その翌日から晴天には連日（もちろん降雨日は排水）夕方灌漑し、翌朝排水することとした。これにより、床面は概して午前中は湿気を保ち、午後にはよく乾燥した。
9. 播種は31年6月5日。
10. 種子は台湾産、本年春採取のもの。
11. 播種量は約6升。

### 4. 発芽後の措置

1. 播種後7日頃からよく発芽した。
2. その後3、4日して被わらを取り除いた。
3. 雑草はよく除去した。
4. 間引、苗の高さが1寸5分となつたものは、苗間3寸位となるように間引し、その苗は移植した。これは殆んど全面的に行われた。間引の目的は云うまでもなく、育苗上の難点②の解決のためになされるものである。
5. 発芽後も引続き灌排水を行うこと前述の通りであつたが、水面は床面より1寸位下方までを限度とした。この措置は育苗上の難点①の解決のためである。即ち、直根を水によつて抑制すると共に側根の発達を促すわけである。

### 5. 結果の概要

1. 数字的に結果を示すことの出来ないのは、私の忙しさに基くもので甚だ遺憾であるが後日を期してい

る。従つて、ここには概要を述べるわけであるが、多少御参考になると思う。

2. 以上述べるところにより、育苗上の難点①及び②は概して解決に近い結果を得たようである。即ち、播種後3ヶ月の苗の高さ、1尺～1尺5寸位なものを任意に掘り取つて調べて見ると、

- イ. 幹の直径（地上3寸）は1分～1分5厘。
- ロ. 根長は2寸～3寸、側根はよく発生生長している。
- ハ. 葉の着生状態も方正。
- ニ. 幹の強さ、堅さは割合に充実している。

かような良苗は、観測区における本数の5割以上に達している。

3. 苗の間隔を3寸以上にあけると、それによつて幹の長さが直径の70～80倍位になつて、更によい強い苗が得られることほほぼ確率的に予見される。これは台湾や、海南島などで、私が取扱つた極めて多数のユーカリの苗の形質を想起して明言し得るところである。

4. 然し、日本内地のように、年間及び1日中の気象条件、特に気温の変化の激しいところにおける育苗技術と、そうでない南半球や台湾などにおける育苗技術との間に相当の相異のあるべきはもとよりのことであらうと思われるが、然し育苗上の難点たる①及び②の解決策には異なるところはないであらう。現にこの実例において、それが証明されているのである。問題は今後局地の気象条件に照応する技術が研究されなければならない。

5. 播種後3回に亘るかなり大きい台風直面に風害を受けたが、風上に七島圃の栽培のあつた部分及び萱塙の防風施設を施した風下部のものは大した風害に侵されてない。これによつて暴風地帯における苗圃は独りユーカリに限らず防風施設を必要とすることが明かにされた。

6. 播種期について、いろいろの問題があるが、今回の育苗の実際から考察すると、大きさの点では4ヶ月苗で充分なように思われるけれども、強さ、充実の点で、6ヶ月苗が適当のように思われる。従つて、

- イ. 11月の秋植にはその年の5月に播種。
- ロ. 4月の春植には前年の10月に播種すべきであるが、越冬のため生長は前者に比して著しく劣るのであるから、その以前に播種する必要がある。

何れにしても播種期と植付季節については今後研究調査の要がある。

7. 育苗作業には土地の所有者である大橋七郎氏が従事されたが、同氏の熱情によつて予期以上の育苗成

績を得たことは感謝に堪えない。

8. 以上の如くにして得られた大葉ユーカリの苗が、静岡県伊豆半島の宇佐見の山地に（本年10月19日掘取）10月23日移植されたことは、隣接してすでに移植されたグロブラスなどの生育状態と今後対比する上に絶好の機会となった。同造林地は本州製材株式

会社用地で、同会社顧問五十嵐勇氏、山林部長須田忠治氏、同社富士工場山林部長望月省次氏、同営林課長代理小出巖氏、課員佐野幸市氏と行を共にして掘栽したことは、大葉ユーカリの将来造林に関し意義の深いことを痛感している。記して謝意を表する。

## 44. ユーカリ苗輸送法の1例

福 岡 県 林 試 青 木 繁

### 1. 緒 言

1尺5寸内外のユーカリ苗を大分県東国東郡武蔵町所在の同苗圃から、静岡県伊豆半島の宇佐見における本州製材株式会社造林地に輸送したので、その際の苗の掘取、調整、包装、並びに輸送の結果について概報し御参考の資に供したい。

### 2. 輸 送 の 時

苗木は本年10月19日午前、午後に亘り掘取り、次項の分類の如くしてAは車内持ち込み、B及びCは鉄道托运により、同日発送、Aは20日夜より23日迄東京の旅館掘置、B及びCは東海道熱海駅止めとして23日受取り、Aは同日山地に定植、B及びCは蔬菜園の一部に来春山行用として床替えた。

### 3. 苗の掘取、調整、包装

A. 鉢付苗。直径1寸～2寸、深さ2寸内外の鉢付とした。この鉢の大きさで側根及び直根ともあまり痛まない程度と思われた。掘取りには移植鋤を用いた。新聞紙半枚二ツ折の一部分を切つて充分に浸水し、これを鉢の底部に当て、更に浸水した残りの新聞紙を以つて鉢を包み、その上をわら2、3本にて締めつける。然る後、更にビニール（1ヤール分を16枚に切つた1片）にて包み、七島圃の層で苗の根元をしぼる。

葉は梢頭部のほかは、葉基部を残して摘み取る。これは葉面よりの水分の蒸散を防ぎ、又植付後の苗の風による動揺の緩和に役立てるためである。何れも活着に有効であろう。

鉢付苗は籠に入れて手持荷とし、10月19日都城発東京行夜行にて上京持参し、掘取後5日目の23日朝迄旅館の廊下に据え置いたが、殆んど痛んでおらなかった。この方法によればほぼ絶対的に活着するであら

う。

### B 鉢付けとしない苗

1. 苗の掘取方法、苗床の一方より鋤を以つて掘り、前述の如くにして葉を摘み取り、直根及び側根の徒長な部分は鋤にて切り捨てた。

2. 右の苗を1束、大は20本、小は40本とし、夫々根際上部3寸位の箇所を七島圃層にて束ね、特に準備した赤粘土の泥に根部を浸し、充分泥を附着せしめた上、新聞紙半枚二ツ折で包み、更にその上をビニールにて包み、根際上部でしぼる。

3. Bの包装。木炭俵をたてに切り開き、その上に右の苗束を並べ、これを渦巻状に巻き、その表面に小巾板を3枚添え上、中、下3箇所に縄掛けた。この方法によるもの1俵分。

Cの包装。前述同様に木炭俵にて渦巻状に包装したものを、2俵分木枠に入れ、なお輸送中包装の動揺を防ぐため縄にて木枠に縛りつけた。

4. 以上の方法によると、木炭俵1俵につき苗束15、6束、300～400本を収容出来る。

### 4. 輸送の結果の概要

1. Aによるものは掘取後5日目、殆んど問題なしに活着することが確められたが、補水すればなお相当日数活着は安全であるようである。

B並びにC共、鉄道托运5日目に受取り、包装を解いて見たが、根部粘土の乾燥し、活着に不安を感じさせられたものは極めて少なかった。これによつて考えると、この包装方法によれば遠距離に堪え、又は植付迄1週間位迄は活着は安全であろうと思われた。

2. 費用の点については一切ふれていないが、B及びCの方法によれば、割合に安価にして然も活着の安全が期待される。今後調査して何等の時に報告することとする。